SRM学会

22年度全国大会開催

ソーシャル・リスク研究、４氏が報告

ソーシャル・リスクマネジメント学会（理事長：上田和勇専修大学名誉教授）は5月21日、オンラインによる2022年度の全国大会を開催した。当日は研究報告に先立って理事・評議員会（議長：上田和勇理事長）を開催し、会員総会に上程する議題を承認、次いで会員総会（議長：亀井弘明副理事長）を開き、前年度の事業および収支決算書の承認、新役員人事の承認、新年度の事業計画の策定等を決議した。続いて優秀著作の表彰式に移り、新たに理事に選任された後藤茂之氏（有限責任監査法人トーマツ）の著書『リスク社会の企業倫理』（中央経済社2021年9月20日発行）にソーシャル・リスクマネジメント学会賞が授与された。その後、4人の会員から研究報告（総合司会：淺津光孝常務理事）が行われた。

凶悪犯罪、検査不正などテーマに

上田氏

亀井氏

淺津氏

松下氏

山田氏

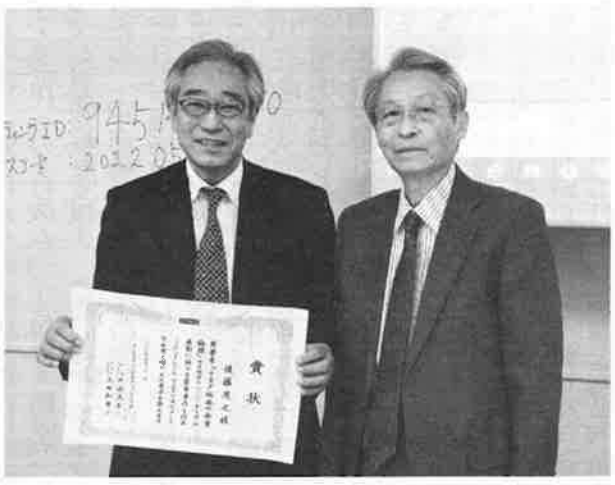
後藤氏

高野氏

川本氏

###事件現場でどう命を守る

最初の報告者・松下義行氏（元関西国際大学、元大阪府警・警視長）は「凶悪犯罪の脅威と極限での危機対応―放火殺人事件等の現場でどう命を守るか―」と題し、事件現場でどう命を守るかについて、主に犯罪捜査業務に従事し、組織犯罪の捜査や池田小学校児童殺傷事件等を担当した経験から詳細な検討を行った。特に、最近の放火殺人事件として衆目を集めた2008年10月の「大阪個室ビデオ店放火殺人事件」、19年7月の「京都アニメ放火殺人事件」、21年12月17日の「大阪クリニック放火殺人事件」等は大阪府警刑事部長退任後の事件だが、退職後も事件・事故による悲劇を防ぐためのリスク管理・危機管理の探究と啓発活動が重要であるとの認識から事件現場を詳細に分析、命の助かる方法を模索。結論として、安全に対する意識と命を守る対策の改善・強化の必要性を強調した。また、生きる希望を失い自暴自棄に陥った凶悪犯罪者を生まない社会構築のための支援の必要性を強調し、尊い犠牲の教訓を忘れずに生かされることを願って、熱のこもった報告を終えた。


学会賞を受賞した後藤氏（左）と上田理事長

検査軽視の風潮に警鐘

第2報告者の山田秀樹氏（大阪家庭裁判所・家事調停委員）は「検査不正事案から見る業務管理の在り方」と題し、21年7月、新聞各紙で報道されたM電機の鉄道向けの設備をめぐる検査不正事件、同年7～9月のT自動車系の店舗で生じた不正車検事案などから、このような事件が生じる背景と管理・監督の在り方の是非を実践面の経験をベースに考察した。まず、人間の振る舞いに限界があることに着目。ベテラン技術者が陥りがちな検査軽視の風潮が生じたことに警鐘を鳴らし、一定の作業能率には限界があること、ベテランの自信過剰を戒め、おごりの意識の存在を指摘した。「ミスの生じる可能性を否定できないことをリスク管理として心しておかないとならない」と主張したうえで、対策としては、検査精度がいかに重要であるかの認識の必要性、ベテラン技術者の心に響く対策の必要性を強調した。

気候変動リスクの影響を解説

第3報告者の後藤茂之氏（有限責任監査法人トーマツ）は「気候変動リスクと金融・保険機能の対応」と題し、COP26（第26回気候変動枠組条約締約国会議）以降の劇的変化を踏まえて、気候変動リスクの社会・経済への影響と対応を概観した。地球温暖化の進展と対応強化の必要を詳しく論じるとともに、COP26以降の金融・保険会社における環境の激変を鋭く浮き彫りにした。気候変動リスクの類型としては、①移行リスク②物理リスク③賠償責任リスクに分類。エネルギー産業の脱炭素化に向けた取り組みなど、移行リスクの影響の予測を論じ、リスク対応に向けてやるべきことと機会獲得に向けてやるべきことを明確に分離して説明した。次いで物理リスクに対しては、温暖化の進行に伴う洪水や干ばつ等の自然災害が巨大化する可能性をとりあげた。賠償責任リスクについても、移行リスクや物理リスクで的確に対応できない事態が発生した結果、第三者から法的な責任追及を受けるといったリスク（訴訟リスクでもある）に言及した。金融・保険機能への影響と課題についても、気候変動と投資行動との関係や資産運用に及ぼす影響にも触れ、保険においては、動態的リスク管理強化の必要性を説き、結論として気候変動リスクに対する総合管理体系構築が必要だと主張した。

小さな地球と大きな社会

第4報告者の高野仁一氏（高野国際会計事務所・米国公認会計士・税理士）は「多様性リスクのソーシャル・リスクマネジメント―小さな地球と大きな社会―」と題し発表。グローバル化した国際社会で、わが国は何を見極め、将来の存続と発展を考えるべきかとの問題意識から、人類の歴史の中では「大きな地球と小さな社会」から、いまや「小さな地球と大きな社会」に変貌したこと、これによる多様性リスクの顕在化を指摘し、警鐘を鳴らした。また、ここに至るまでの経済成長とリスクの軌跡を述べ、企業のグローバル化がもたらした地球規模での多様性リスクの顕在化を明確にした。わが国の姿としては、グローバル企業の発展段階において、個別企業は国内市場から輸出・輸入、対外投資、海外市場へと多国籍企業展開を経ながら、多様なリスク環境に直面し乗り越えビジネスチャンスをつかみ取り、企業も国も適正規模を見極め、社会と共存するソシオ・カンパニー、ソシオ・カントリーを目指しつつ成長を続けなければならないと結論づけた。最後に川本明人副会長（広島修道大学名誉教授）の閉会の辞をもって、散会した。